

氏名（本籍）	大清水（福本）薫（東京都）
学位の種類	博士（芸術学）
学位記番号	博甲第 6999 号
学位授与年月	平成 26 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	プロト・アッティカ式陶器と神話表現—葬制における再検討

主査	筑波大学教授	博士（芸術学）	守屋 正彦
副査	筑波大学教授	Dr. Phil.	長田 年弘
副査	筑波大学准教授	博士（芸術学）	直江 俊雄
副査	武蔵野美術大学教授		篠塚 千恵子
副査	公益法人平山郁夫 シルクロード美術館学芸室長	博士（文学）	平山 東子

論文の内容の要旨

（目的）

本論文の目的は、プロト・アッティカ式陶器における神話表現の興隆の背景を明らかにすることにある。前 7 世紀の神話表現は、古代ギリシア美術の前史的な扱いをうけるに留まり、神話表現誕生の背景にまで深く踏み込まれることはなかった。Fittschen, Shefold, Ahlberg-Cornell らによって、前 8 世紀末から前 7 世紀の神話図像について主題の特定やテキストと図像の対応関係などについて考察がなされたが、これらの先行研究においては、神話表現の誕生はホメロス叙事詩の成立に促されたパン・ヘレニックな現象として捉えられ詳細な考察がなされなかった。本論文は、美術史学および考古学の、近年の研究成果を総合し、神話表現の成立に関してその社会的背景を明らかにする試みである。

（対象と方法）

本論文においては、前 7 世紀プロト・アッティカ式陶器の代表作を研究対象とし、具体的な用途と図像の表現意図に関して考察を進める。

第一章では、対象作例の範囲について確定を行う。前 8 世紀中頃から前 7 世紀、すなわち後期幾何学様式 I 期からプロト・アッティカ式期までの墓標陶器を取り上げ、全 31 点を分析する。前 7 世紀に葬礼が上層階級の男性のみに独占され、神話表現は男性の葬礼と結び付いて表現されるようになったことを論じる。

第二章から第四章では、個別の作例を取り上げ、神話表現の成立をより具体的な側面から探る。第二章では、《エレウシスのアンフォラ》の神話図像を検討し、ペルセウスおよびヘラクレスを表す主題に

ついて、上層階級が自らと英雄的な祖先とを結びつけることを欲したゆえに表現されたとする新解釈を提示する。第三章では、《キュノサルゲスのアンフォラ》を取り上げる。Ahlberg-Cornell の仮説を再検討し、胴部の天馬の引く戦車に乗る 2 人の人物とそれを見送る人物の解釈について新説を提唱する。第四章では、アイギナで発見された《メネラオスの台座》の、円錐形台座にディノスを乗せる器形について詳述し、本作が、アテナイもしくはアイギナの上層階級の葬礼のために作成された陶器であり、東方的な外観は彼らの自己顕示の意欲を反映したものであったことを論証する。

第五章では、前 8 世紀以降に墓標装飾から消滅したプロテシス図やエクフォラ図が、前 7 世紀にどのように変容したかについて考察する。社会が男性原理に基づくものへ変化し、葬礼図像において死者の男性、嘆きの女性という記号が確立したことを論じる。

(結果)

本論においては、プロト・アッティカ式陶器における神話表現の誕生の背景に、前 7 世紀のアッティカ上層階級に属する男性の営む豪華な葬礼が関わっていたことを論じた。貴族階級の男性は、ポリス社会の形成という変動期にあって、自己の優位性や権威を守る必要があったと思われる。神話・叙事詩主題の中でも、とりわけ敵と戦う英雄の勝利が造形化されたのは、偉大な英雄と自らの繋がりを誇示する必要があったためと考えられる。プロト・アッティカ式陶器における神話表現は、民主主義的な社会へ向かう新しいアッティカの胎動を背景に、貴族層の自己顕示を意図して誕生したと結論する。

(考察)

プロト・アッティカ式陶器は、従来、考古学あるいは歴史学の考察においても重要な歴史資料として扱われてきた。しかし先行研究においては、神話表現の誕生とその背景の問題は副次的な扱いにとどまってきた。本論文は、神話表現を有するプロト・アッティカ式陶器について、美術史の観点から様式を検討し作例ごとに元来の用途を推定する。学問領域間の方法論の相違を乗り越え、各領域の成果に架橋する新しい試みである。

審査の結果の要旨

(批評)

前 7 世紀の視覚表現における神話の造形化に関しては、先行研究において明快な説明を欠き、とりわけ神話を造形化することを欲した社会的背景に照明が当てられなかった。本論文は、奉納溝を中心とした儀礼において、前 7 世紀プロト・アッティカ式陶器がどのように用いられたかを検討し、神話表現の誕生について、貴族層によるポリス型社会への抵抗と見なす新解釈を提示する。神話表現の成立そのものについては、葬礼の分野に限らない複雑な歴史的経緯を有すると思われ、図像の成立についてその全ての背景を議論するには至らなかったが、研究成果は独創的で高く評価できる。また古代史学など周辺学問領域への波及効果も期待しうる。

平成 26 年 1 月 28 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。